

中国 4000 年前の治水神

禹王（文命）との“であい”

足柄の歴史再発見クラブ
井上 三男



文命宮：1726（享保11）年 建立

東京オリンピック開催後2.5年の1967（昭和42）年に測量機器メーカー（株式会社測機舎）に入社し、担当させられたのが光波距離計の開発だった。計測機器の一部にはまだ真空管がつかわれていた時代であり、東京大学地震研究所からの研究開発依頼であった。開発に参考になった機械は、国土地理院（目黒区にあったころ）所有のジオジメータ4型（AGA社スエーデン製）であった。

社内では、すでに基本的な設計は進んでいたものの距離情報を得るまでには至っていなかった。ジルコンランプが発する光に信号を乗せ、反射してきた光からフォトマルチプライヤーで距離情報を取り出す。そして1km程で1cmの変化量が読み取れる機械が誕生した。真空管式の機械で1km先の距離情報を得る経験をしたのは、たぶん私が最初で最後ではないかと思う。

電子機器の流れは、半導体へと推移しご多分にもれず光波距離計の製品化開発も半導体方式に舵が切られた。

すでにアメリカでは、アポロ計画が進められ新しい電子部品が市場に出回ってきた。

1972（昭和47）年にカナダのオタワで開催された国際写真測量学会（ISP）の商業展示にトータルステーション型光波距離計（現在 国立科学博物館地下3階に同型機種が展示されている）を出品した。そしてその展示会場でお目にかかったのが、人工衛星を使った測位システムで、今でいうGPSであった。

その後の測量機器の開発は、トータルステーションやGPS受信機へと開発は進んでいった。

公共測量作業規程が求める精度を十分に満たす機器が完成した頃、次世代の測量機械をと考えたとき、ポイントポジショニングでは開発する製品が思いつかず、空間情報等の考えに辿りついたところに、現役を離れる時期がやってきた。

このころから先人達が残してくれた素朴なローテク技術に興味を持ち始めた。そこで始めたのが、測量機器の古典機の収集であり、測量機器の変遷を調べているうちに筆者の地元（神奈川県西部足柄平野が生誕）の二宮尊徳に出会った。尊徳は、富士山宝永噴火の80年後の1787（天明7）年に、酒匂川の中流の「栢山」で誕生しており、尊徳の晩年の弟子の家には、大野規行作の小方儀や

象限儀等の測量具が秘蔵されている。その偉業は足柄平野を流れる酒匂川の治水や利水を始めとし、報徳堀や千間堀等数多く残っている。

昨年、酒匂川は治水400年を迎えた。このころといえ、戦乱の世から徳川の安定した時代になり稲作を中心とした世の中に変わり、全国各地で田地の開発のために治水・利水が行われ始めた。

足柄平野でも荒れ果てた河原を穀倉地帯にしようと大がかりな治水工事が行われた。

小田原藩を治める大久保忠世・忠隣親子は、乱流する足柄平野の川筋を一つにまとめ、土地が比較的高い東側にも稲作用の水が行き届くように、いまの酒匂川を造った。その約100年後の1707（宝永4）年に富士山が大噴火し、大量のスコリア（火山灰約80cm）がこの地を襲った。酒匂川の水系は、富士山麓・箱根山系・足柄山地・西丹沢であり、これらに降り注いだ「とけない黒い雪（スコリア）」は、雨水とともに上流の治水によって造られた3つ（春日森土手・岩流瀬土手・大口土手）の土手を直撃し、以前と同じように氾濫し、荒涼とした河原になってしまった。

そこで、小田原藩主の忠世を初代とする大久保家の六代目に当たる忠増は、被害の多かった地域を幕府に返上し、幕府のもとで復興をはかった。

当時の将軍徳川吉宗は、大岡越前守忠相をとおして配下の「田中丘隅」に治水工事を命じた。

1726（享保11）年に土手普請が完成すると、大口手と岩流瀬土手に「文命宮」と「文命碑」を建立すると共に、土手の名を文命東堤・文命西堤と命名した。

その碑文は、田中丘隅が作成し、儒学者の



文命東堤碑は、田中丘隅が作成し荻生徂徠が推敲した

おぎゅうそらい すいこう
荻生徂徠が推敲した。

ところで、「文命」は「禹」の別名で、中国最古の夏王朝（紀元前2070年）の皇帝のことである。黄河を治めたことから治水の神様として敬われた。「禹」は、13年間の治水工事中に、家の近くまで3回来たのに立ち寄りず治水のために働いたとの言い伝えがある。中国での禹王の原碑は、紹興で最近発見された。

大漢和辞典によると「禹」は、①むし蟲②人名。夏の始祖。初め堯・舜二帝に事へ、洪水を治めて功があった。③たすける。④のびる ⑤さしがね。さしがねで測る。等など。

「禹碑」は、全文77文字で表現がされていて、利根川（片品川）に建立されている禹王碑は、篆書体で画かれており、原碑に近いものが感じられ注目を浴びている。

筆者が、最初に出会った「禹」は、京都御所御常御殿「中段の間」の襖に描かれた「大禹戒酒防微図」である。



治水神「禹王」は、一般に広く敬われる一方、自らお酒に対する戒めをしたようだ。

この足柄平野に「文命」と名のつく施設が3つある。そのひとつが先に述べた文命堤がある。

その文命堤（大口土手）の内側に農業と発電を目的に神奈川県と東京電力により用水路をつくり「文命用水」と名付けた。これは、日本の疎水100選に選ばれている。

そして、昭和22年に吉田島村・酒田村・福沢村の組合立の新制中学校が創設され、その名を文命堤から文命中学校と名付けた。

筆者の卒業した学校でもある。

全国の「禹王碑」については、急流河川流域の治水と豊穰祈願として碑が建てられている。

現在確認している場所は、全国10河川（片品川・泮川・富士川・酒匂川・鴨川・淀川・大和川・香東川・太田川・臼杵川）の合計18箇所に関係する碑がある。一昨年は、これらを全部行脚し、昨年11月には、禹王碑が建立されている地域の関係者が集い、神奈川県西部にある開成町で開催された禹王サミットと言うべき「第1回全国禹王（文命）文化まつり」に参加した。そして第2回の開催地に集結することを誓って閉幕した。

ここに全国の代表的な禹碑を写真にて紹介するが、日本海側や東北地方・北海道には、まだ発見されていないので、ご存知の方のご一報に期待する。



左：文命西堤碑 右：文命宮

片品川(古仲)



淀川(島本町)



淀川(毛馬)



大和川



太田川



香東川



臼杵川

今年、禹王（文命）にちなんだ酒匂川に、今も残る「かすみ堤」を取り上げ、先人の偉業を後世に伝えるために『[生きている かすみ堤 酒匂川九十間土手築堤70周年記念](#)』のイベントを企画している。

約40年前、光波距離計を開発していたころ、アメリカのシリコンバレーから技術の最先端を追いかけ、今は限りなくむかしにさかのぼる。自分なりの夢を追いかけ、なんでもかんでもやってみたくやってみたい、いつも自ら忙しがっている日々である。

おわりにG空間、空間情報、社会基盤等の言葉が流行っている。測量と測量機器の歴史や変遷を探索するとそこには生活基盤たる言葉が浮かんでくる。生活基盤は、インフラだと答える人が少なくない。水を治め利用して安住の地を得た先人たちをどのように表現したらいいのだろうか。大地震や異常気象が頻発する昨今これらをさらに学び後世に伝える価値はありそうだ。

■参考文献：大漢和辞典 富士山と酒匂川

日本写真測量学会平成22年度秋季学術講演会発表論文集